

## 朝鮮通信使史跡探索（一）

中 川 浩 一

二年次学生を対象とする「演習」のテーマを、今年度は日韓交流史と定めて、開講第一日にはビデオ『歴史紀行 牛窓と朝鮮通信使』を視聴させた。二十五分にまとめられたこのビデオは、岡山県牛窓町が企画し、山陽映画が制作を担当して発売された。一九九六年四月、牛窓へ旅しており、観光案内所で購入したものである。

視聴後、二十人の学生に感想を書かせたら、江戸時代の大半は鎖国であり、長崎を唯一の窓口として、オランダ人、中国人が貿易のための滞在を許されていただけと認識していたのに、李氏朝鮮から十二回も国交の使節が来訪したなどは全く知らなかったと、ほとんどの学生が記載した。朝鮮通信使という歴史用語は習ったが、詳細は知らなかったとする者が数名いたけれども、具体的な内容にふみこんで学習した経験を持った者は、一名にすぎなかった。

だが彼等は、中学生当時、学習していた筈なのである。平成二〜四年度がおおむね彼等の中学時代なのだが、この時点で歴史的分野の教科書は、例えば次の様に記している。

「朝鮮とは、家康のとき国交を回復してから、将軍がかわるごとに慶賀の使節が来る慣例となった。中学生の三人に一人が使用した市場占有率首位の『新編新しい社会』歴史（東京書籍）での事例であった。

この様に学習した筈なのに記憶にとどめる者が少ないのは、具体的事例を伴わず、通り一遍に教科書を読んだからだろう。

### 巖原に建つ友好記念碑

江戸時代、李氏朝鮮との国交実務を培ったのは、巖原に城下町を構築した対馬藩宗氏であった。都合あわせて十二回来航した「朝鮮通信使」のうち、江戸に足跡を記した十回の使節団に、藩主は同道の旅を行っている。それゆえ、「朝鮮通信使」にかかわる史跡探索の筆は、巖原の事例から書き始めることにしたい。

豊臣軍団「唐入り」の拠点名護屋に最寄りの呼子を発着するフェリーで壱岐に渡り、フェリーを乗り継ぐと巖原に到達する。福岡国際空港発着の定期航空便で対馬空港経由の方法もあるが、「朝鮮通信使」にかかわる旅は、フェリー利用によるべきだろう。Y字形に入りこむ巖原港で左手に位置する久田浦では、対馬藩御用船舶着場「お船江」の寛文三年（一六六三）築造による五基の堤が、そのままに残されている。

金石城（かねいしじょう）と呼ばれた城地には、長崎県立対馬歴史民俗資料館と巖原町資料館が設けられている。教科書に掲載される朝鮮通信使絵図は、羽川藤水『朝鮮人來朝図』神戸市立博物館蔵による場合が多いけれど、対馬歴史民俗資料館架蔵の朝鮮通信使絵巻三巻も、貴重な資料とされている。とくに「正徳元年辛卯年朝鮮通信使登城行列図」には、対馬藩眞文役雨森東五郎芳洲の馬上の姿が描かれる。

二つの資料館が対置する城跡の庭園には、朝鮮通信使にかかわる記念碑が二基建っている。対馬歴史民俗資料館寄に「朝鮮國通信使之碑」、巖原町資料館寄に「誠信之交隣 雨森芳洲先生顕彰碑」が建つのが、それ



写真① 「朝鮮国通信使之碑」

右奥が長崎県立対馬歴史民俗資料館(1997年3月撮影)

らである。

「朝鮮国通信使之碑」は、裏面に一九九二年二月十二日建立 朝鮮国通信使之碑建立委員会の記事と碑文が、大韓民国文学博士斎山崔世和の書により史実を記している。副碑には、日韓双方から委員を選んでの建立であり、対馬側代表委員永留久恵(委員六名)、韓国側代表委員黄壽永(委員十三名)の氏名が裏面に漢字で記されている。副碑表面では日韓双方の言語で、朝鮮通信使の由来が明らかにされ、韓国語にも漢字が表記される。

#### 江戸時代の朝鮮通信使

朝鮮通信使は、慶長一二年(一六〇七)から、文化八年(一八一二)までの間に、一二回来日した。それは、李氏朝鮮との間の善隣友好の誼(よしみ)を通す国家外交の使節でもあり、一大文化使節でもあった。

時に正使以下五〇〇名にも及ぶ一行の来日は、壮麗な絵巻を成し、洗練された学問芸術と、絢爛とした異文化の香りを伝えるものであった。

この朝鮮通信使の、有形、無形の行跡は、現在も各地に色濃く遺り、近世、日本が鎖国の時代にも、言葉と慣習を異にしながら誠信の心による伉礼を交した隣国と、その人々へのさらなる尊崇の情念を揚げさせる。世紀を越えて、今、新しい東アジア国際社会の構築の時に鑑み、朝鮮通信使の恒久的に有する史的意義への思いを深くするものである。

韓国語による文章では、後期朝鮮通信使、宣祖四十年、純祖十一年など表記が異なる個処が少しあるけれども、基本的には同文同意で記されていると判断できる。

巖原で葬られた雨森芳洲

「雨森芳洲先生顕彰碑」には、その人柄を説明したものと、建碑資金寄



写真② 「誠信之交隣 雨森芳洲先生顕彰碑」

写真③ 「雨森芳洲先生墓」  
巖原町長寿院墓地  
(ともに1997年3月撮影)

付者の氏名を記す副碑がそれぞれ付設されている。建立は平成二年八月で芳洲会が主導した。それゆえ朝鮮通信使の由来を記した碑の建立に先がけたことになる。

雨森芳洲 (一六六八—一七五五)

寛文八年、現在の滋賀県伊香郡高月町雨森に生れたというが異説もある。幼少より京都で家業の医を修めたが、後に儒学を志し、十七歳で江戸に出て木下順庵の門に学ぶ。新井白石、室鳩巢、榊原篁洲、祇園南海らと木門の俊英と称されたが、後に幕府の執政となった新井白石と日本国王号問題で対立し、論争におよんだ経緯はよく知られている。

二二歳で師の推挙により対馬藩に任官、以来六十余年、朝鮮外交の

衝に当り、朱子学の名分論を通して隣国との交渉に活躍した。

朝鮮語、中国語にも精通した芳洲を、第九回朝鮮通信使の製述官申維翰もその著「海游録」で偉大な人物として紹介している。江戸幕府鎖国時代に、希有の国際人であった芳洲の名著「交隣提醒」には、「たがいに欺かず、争わず、誠実と信頼が肝要」と説き、対等の交隣思想と人道主義的信念が貫かれている。この誠信の交隣こそ現代にも通じる理念として、日韓新時代を迎える今日、ここに改めて顕彰するゆえんである。

こうして長期にわたって朝鮮との外交に従事し、朝鮮通信使に二度同行した雨森芳洲は、宝暦五年（一七五五）、対馬で没し、長寿院に葬られた。長寿院は巖原市街地の北東端に位置し、「雨森芳洲先生墓」と記し、右側面に寶暦五乙亥年正月六日、左側面に行年八十八歳の文字を配する墓石は、小さな丘の頂きに建っている。

長寿院の門前には、巖原町教育委員会による次の解説が掲示される。

#### 雨森芳洲の墓

町指定文化財 史跡 昭和五十四年十二月六日指定

寛文八年（一六六八）近江国生まれ。対馬藩に仕へ禄高二〇〇石。宝暦五年（一七五六）没八十八歳。

江戸時代の大学者として仰がれた木門（木下順庵）の高弟で、新井白石、室鳩巢等と共に木門五先生の一人に数えられた。師の推挙により、対馬藩に出仕したのが、元禄四年（一六九一）年であった。

正徳四年（一七一）の朝鮮通信使来聘時には新井白石が改革した接待案に朝鮮側は強い不満を示したが、芳洲はその間にあってよくこれをまとめあげた。

彼は文献実証を尊重し「記録さえ確かならば幾百年ともなき長生したる人を左右に置けると同じかるべし」として、藩政の記録を重要視した。現在も、対馬藩の日記類・記録類は、膨大な量が貴重な資料として保存されている。



写真④ 東アジア交流ハウス 雨森芳洲庵  
(1997年4月撮影)

ちなみに、巖原町役場が発行する冊子『善隣外交の華 朝鮮通信使』には、雨森芳洲に強い注目が集まったのは、平成二年五月、韓国の盧泰愚（ノテウ）大統領の演説により、その哲学である「誠信の交わり」が賞賛され、脚光を浴び、て以来と記される。それが僅か三か月後に一般の浄財による芳洲顕彰碑建立の要因になった由である。

### 生誕地に建つ雨森芳洲顕彰施設

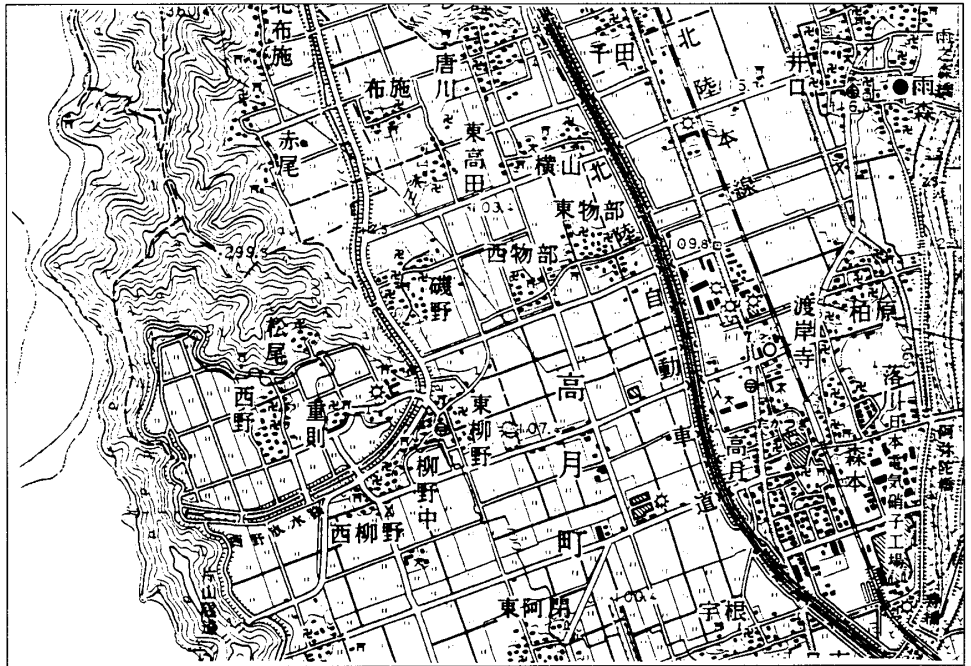
雨森芳洲顕彰は、生誕の地においてもなされている。その実績は、地域住民によるボランティア活動の拠点「東アジア交流ハウス雨森芳洲庵」となり、日韓交流の礎として有効に機能するのだが、前史に位置づく芳洲会の発足は、大正十三（一九二四）年にさかのぼる由である。

JR北陸本線高月駅から北北東へ二キロほどの位置にある雨森芳洲庵



写真⑤ 雨森芳洲庵庭園  
左奥に「雨森芳洲先生碑」が建つ  
(1997年4月撮影)

雨森芳洲庵位置図(原寸) ●が雨森芳洲庵  
1:50,000竹生島  
平成6年修正



は、県と町の補助金を受けて既存の家屋を改築した展示施設と墓石状の「雨森芳洲先生碑」、雨森芳洲神社がある庭園とからなりたっている。雨森芳洲庵入口には、次の文を配する表示板が、ことの由来を説明する。

芳洲は、寛文八年（一六六八）五月十七日、近江の国伊香郡雨森郷で医者業とする清納の嫡子として生まれました。

芳洲は十八歳の時、学問の道を志して江戸に上り木下順庵の門をたたく。やがて新井白石や室鳩巢と肩を並べる五人の高弟の一人に数えられました。

芳洲が二十二歳の時、師の順庵の推挙で僻遠の地对馬藩の宗氏に仕えることになりました。

江戸時代、徳川幕府は鎖国政策をとり、外国との交流のない時代でしたが、隣の国朝鮮とは「通信の国」として交流があったのです。

対馬藩に儒者として迎えられた芳洲ですが、二十九歳から朝鮮方佐役という外交の実務を担当する役を命ぜられ、対馬藩を受け持つ朝鮮外交の担い手として活躍いたします。

当時は、筆談外交の時代でありましたが、芳洲は「相手の国の言葉が語れなくて何が交隣ぞや」と三十六歳から三年間釜山に滞留して、朝鮮語を修得しました。また、中国語も「五十年一日も廃せず」読誦しました。江戸時代の中期、三音（三ヶ国語）に通じる国際人は、雨森芳洲ただ一人であつたらうと思われれます。

芳洲は正徳元年と享保四年の二度に亘って朝鮮通信使に随行して「誠信外交」を実践しました。

芳洲は八十八歳という高齢で対馬で天寿を全うしますが、その生涯は、日朝友好の架け橋を渡した先駆者として光り輝いています。

当芳洲庵では、芳洲や朝鮮通信使に関する資料を展示すると共に、芳洲の遺志を受け継ぎ、韓国や中国を中心に国際交流を草の根で推進しています。

庭園の最奥に建つ「雨森芳洲先生碑」は漢文で顕彰の発端を説明する。雨森芳洲に着目したのは、北富永小学校長であつた藤田仁平で、その努力により、芳洲が従四位に叙せられた。

芳洲会は大正十三（一九二四）年に発足し、建碑、神社創立などの活動が、戦前の時点で実現した由である。

戦中から戦後、芳洲への関心が薄らいだ時期を経て、日韓国交正常化により雨森芳洲の存在が再び脚光を浴びる結果となった。雨森芳洲顕彰

記念館としての「東アジア交流ハウス雨森芳洲庵」が竣工したのは、昭和五十九（一九八四）年で、来訪者は増加の一途をたどってきた。高月町には柏原地区に町立歴史民俗資料館があり、雨森芳洲先生像が展示されている。

## 注

(1)「朝鮮通信使」と表現したのは、李氏朝鮮からの国交使節を広義にとらえたからである。正式には通信使Ⅱ誼（よしみ）を通わす使節は、寛永十三年（一六三四）来訪の第四回以後である。第三回までは、対馬藩によって偽造された国書への回答、二度の倭乱（侵略戦争）によって連行された人々の帰国促進を名目とする回答兼刷還の使節であつた。

(2)木村一雄「雨森芳洲と朝鮮通信使」（平成六年・東アジア交流ハウス雨森芳洲庵）三十九〜四十一ページ

## 〔補節〕

冒頭で、二年次学生が学習した筈なのに、朝鮮通信使来日の事実をほとんど記憶していないのは、教科書が具体的記述を欠く点にも起因する様に思われると記したが、現行の中学校教科書での扱いが、どの様になっているかについて、検討してみよう。

中学校社会科歴史的分野の教科書は七種類で、いずれも平成八年当初に文部省による検定に合格し、平成九年度から引き続き四年間の使用が予定されている。

朝鮮通信使については、全ての教科書が取りあげているが、内容についてはかなりの粗密が認められる。最も記述が簡単なのは日本書籍『中学社会』で幕府の対外政策を扱った中に「朝鮮と中国」の小見出しをかけた、家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、將軍がかわるごとに四〇〇人ほどの朝鮮の使節団（通信使）が来るようになった」と記している。別ページに「朝鮮通信使の行列」の絵を掲げるが、その説明は「新井白石は通信使をむかえる礼法を簡素にした」と記すのみである。



東京書籍『新編新しい社会』、清水書院『日本の歴史と世界』の記述も簡単だが、前者は別ページに「唐子踊り」の写真を掲げ、通信使が江戸への道中で歓迎されたこと、牛窓町の唐子踊りとのかわりに言及する。後者は、雨森芳洲を写真付のコラムに収め、具体的な解説を施している。

詳細な解説を収めるのは、大阪書籍『中学社会』、清水書院『中学生の歴史』、教育出版『中学社会歴史』で、とくに教育出版は見開き二ページを「朝鮮通信使の往来」にあて、津市の唐人踊り、朝鮮との国交回復、五〇〇人の通信使の小見出しをつけ、内容は非常に具体的である。これとは別に、いわゆる本文で、対馬（長崎県）は、国交の復活した朝鮮と交際する窓口であった。朝鮮の使節は幕府と交流し、日朝貿易は対馬藩の宗氏が独占した」との記述を行っている。

帝国書院は、一ページを使う具体的な解説の中で通信使が文化交流にも資した事実にも言及した。大阪書籍はいわゆる本文で五行の解説を施した後、「朝鮮通信使と琉球使節」について一ページを用いて具体的な解説をなしている。

これらに対して日本文教出版『日本の歩みと世界』は、本文四行の記述とは別に、江戸時代の交易を扱った見開き二ページの中で、朝鮮とのかかわりにもふれるのだが、「貿易をおこなうとき、わずかな数の日本人が、プサン（釜山）の日本館の中で、特定の朝鮮の役人と接触した」と書いて、誤解を招くのは不適切である。釜山の草梁倭館に在留した対馬藩民は、数百人の規模に達したと史書は説くからである。

以上、簡単な記述に終るものでも、従前のものに比べると踏みこんだ記述をなすものがほとんどであり、朝鮮通信使にかかわる認識も、次第に深化すると期待できよう。